

湯村山城跡発掘調査報告

萩原 三雄
平野 修
(甲府市史編さん専門委員)
(帝京大学山梨文化財研究所)

一 はじめに

永正一六年(一五一九)に始まる武田信虎による守護館の甲府移転は、甲斐国内ではきわめて大きなでき事であった。それは、『王代記』や『高白斎記』を始めとする当時の記録類に詳しく書きとめられていることから判る。これらの記録類をおうと、当時の人々がこの新しい事業に耳目をそばだてて、注視していた様子すら彷彿できそうであるが、それほどに信虎のこの新拠点づくりが画期的で、象徴的であったことを物語っている。事実、この移転事業は、甲斐一国の統一と戦国大名として威を示そうとする信虎の政治的野心の達成という側面だけでなく、のちの甲府の都市形成の基礎をなし、産業・交通・文化の集積化に大きな役割を果たしたのであった。

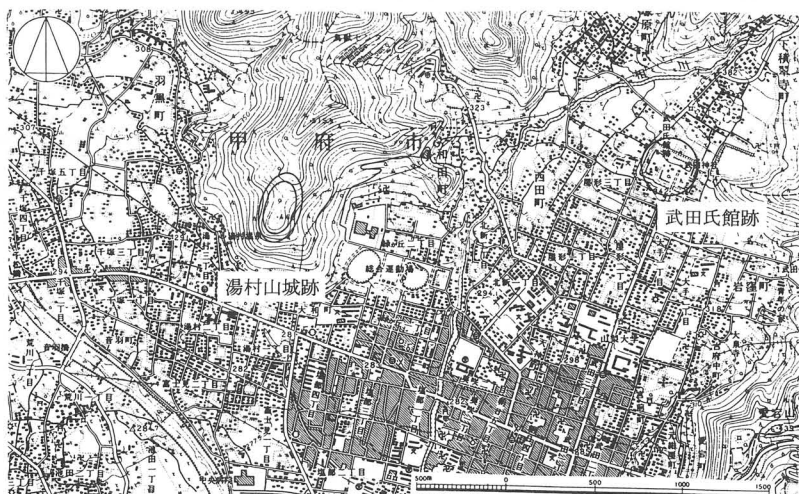
この一連の新都市づくりの中に、今回報告する湯村山城も登場する。守護館の躑躅ヶ崎館、詰城の要害城の築造につづいて、大永三年(一五二三)に本城の築城が行われるのであるが、この絶え間ない一貫した築城工事をみると、湯村山城が新都市づくりに重要な一翼を担っていたことが読みとれる。甲府市史編さん委員会では、こ

のような歴史上重要な位置が与えられている本城の具体的内容を把握し、都市の形成過程にいかなる役割をもち得たのか、その歴史的意義の解明のために考古学調査を計画し、以下のような調査日程により実施した。

湯村山城は、今日まで、甲斐国の政治史上貴重な城郭との評価が一部では与えられながらも、顧みられることも少なく、躑躅ヶ崎館や要害城の付属施設という認識が定着していた。しかし、居館や詰城とは異なる機能をもち、相互に補完し戦国都市甲府が実現していたことを考えるならば、湯村山城に対する評価は、さらに積極的であってよいであろう。湯村山城に対する研究の一層の進展を期待しながら、以下調査の報告を行いたい。

二 位置と歴史的環境

山梨県のはぼ中心地域を占める甲府盆地の北部一帯には、帯那山系を始めとする高峻な深山が群馬・長野県等と県境を画するように横たわり、それらの山系から盆地の平地部に近づくにつれてしだいに標高を低くしながら愛宕山・湯村山・羽黒山などの山々がせり出



(国土地理院発行 1:25000甲府北部使用)

第1図 遺跡位置図

すように展開する。これらの山系の間からは、幾筋かの水系がぬうように流れ、そこに扇状地地形をつくり出しているが、永正一六年に武田信虎が守護館を構えた古府中一帯も、帶那山系に端を発した相川によって形成された扇状地上にのる。こうした地形上の特質によって、相川扇状地一帯は、北方に帶那山系、西側に湯村山、東側には夢見山や愛宕山などに囲まれた天然の要害地形がつけられ、戦国期の動乱時においては防衛上絶好の環境を提供した。

これらの山々は、戦乱の日常化した当時においては、城郭占地上最も適した条件となし、この地域でも要害城や湯村山城の他、北方に数多くの烽火台等が築造されることになった。湯村山は、居館躰躰ヶ崎館から南西方面の位置にあり、盆地に向かってせり出すような山系の突端部分をしめる。ここから南側一帯には広大な甲府盆地が眼下に見わたすことができ、眺望がきわめてすぐれている。西方には八ヶ岳方面の広大な一帯が、また南方から東方には、盆地を越え、さらに遠く御坂山系の一部まで視野に収めている。この湯村山山頂の標高約四四六メートルの地点に、湯村山城は占地する。

湯村山及びその周辺地域の歴史環境には、古代においては特にすぐれたものが多い。山麓に存在し、全長一四メートルをこえる巨大な石室を有する六世紀中ごろ築造の万寿森古墳を筆頭に、湯村山中腹に占地する積石塚を含む湯村山古墳群など、六・七世紀にかけて大いに栄えた様相を示す。そのうち、真言宗の名刹塩沢寺の創建など、この地域の歴史性豊かな風土を感じさせているが、中世戦国期に至ってこの周辺地域がどのような展開を見せたのか、現段階では知る手がかりが少ない。中世の時代、志摩荘及び小松荘と称されたこの地域の歴史景観がどのようなものであったのか、信虎の甲府進出と

湯村山城築造の経緯を考えると、興味深く、今後の課題とすべきであろう。

三 湯村山城の歴史と研究略史

永正一六年（一五一九）、躰躰ヶ崎館の築造を契機に開始される甲斐府中の新都市づくりの一連の事業の中で、詰城の要害城について、大永三年（一五二三）、湯村山城も築造される。このことは、『高白斎記』に、「大永三^{癸未}年（中略）四月廿四日湯ノ島ノ山城御普請初。五月小十三日水神ノホクラ城ニ立」と記述されることにより、その経過の一端がうかがえるのであるが、信虎の府中移転、居館の建設など甲斐国統一の基礎となる本拠地づくりの一翼をなして、当初より築造が意図されていたことが判るのである。翌大永四年の条には、「六月小十六日一条小山御普請初。」の記述が見え、湯村山城について一条小山、すなわち現在の甲府城の地にも何らかの防衛施設が設けられたことが明らかである。この湯村山城と一条小山がほぼ対のようになって当初から計画された点を考慮すると、相川扇状地上の相当広範囲に、信虎は既に永正年間段階から大規模な都市建設を試みようとしていたことになる。そして、この両者は、地理的にみて、府中城下への玄関口的な位置にあつて、防御の役割が与えられたことになる。これらを明快に証する積極的な史料はないが、信虎の府中建設計画を考えていくうえで、興味深い視点のひとつである。

湯村山城はこのように、信虎の府中建設の意図を検討していくうえで大変重要な城であるにもかかわらず、近年までそれほど関心は寄せられず、江戸期においては、『甲国聞書』に、「湯の島の上に

城有、信守、信昌二代の内に築給と云云、山上に水有……」、「『甲斐国志』に、「湯村ノ東ノ山上ニ一所石塁及湧泉アリ。此ニモ城山ト云……」と見えるのみで、きわだつて研究が深められた様子は見あたらない。躰躰ヶ崎館や要害城のかげにかくれ、小規模な砦や烽火台の類として興味の枠外におかれた感がつよく、その後の武田氏研究上においても、湯村山城に関わる議論や歴史的評価は少ないといつてよい。

湯村山城に対する積極的な調査研究が開始されるのは、考古学の側からの中世城郭研究が活発化する一九七〇年後半以降のことで、その先べんをつけたのは、山梨大学考古学研究会による測量調査とその報告である。この調査は、簡略な測量調査を主体とするものではあったが、それによって縄張と規模がはじめて明らかとなり、湯村山城の全体構造がおおむね把握できるようになった。翌一九八〇年に刊行された『日本城郭大系』は、この成果を前提に、縄張の状況と特徴を述べ、「単なる烽火台ではなく、古府中防衛を主眼とする丸山の要害城の支城としての役割も帯びていた」と指摘したことを見ても、前述の測量報告は、湯村山城に関する研究にとってひとつの画期をなしたといつてよい。

続いて刊行された『山梨県の中世城館跡分布調査報告書』でも、湯村山城をとりあげ、本城の南を走る街道に、「関屋」という地名が残存することから番所などの存在を示唆しつつ、「府中入口の防備とともに、信州方面への監視的機能・情報収集機能を担っていた」ことを推定し、『日本城郭大系』の考え方をほぼ踏襲しながら、湯村山城の歴史的意義づけを行っている。一九八七年の『図説中世城郭事典』でも、縄張の詳細な説明に加え、大永年間以後の普請や、

武田氏滅亡後の徳川氏による改修の可能性を強調しているが、これら一連の研究の中では、湯村山城の役割と性格についてはほぼ共通した認識にたっているといっている。

湯村山城の調査研究は、以上のように、考古学及び城郭研究者によって、八〇年以降活発化し、ほぼ共通した見解を得るに至っているが、しかし内部構造や経営のあり方など、より本質的で具体的な内容になると残存史料の限界性が目立ち、推定の域を出ない点が多い。築城年代が確実で、性格や機能もある程度特定できる中世城郭はきわめて稀で、中世城郭研究上貴重な事例であるために、本城の歴史的意義の解明にむけて研究の一層の深化が望まれよう。

四 調査の経過

(1) 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和六三年七月一九日から九月九日まで実施された。今回の調査では、湯村山城跡における郭内の遺構・遺物の確認を目的として、遺構の保存も考慮に入れトレンチ調査を採用した。

七月一九日 器材を搬入し、調査開始式を行った後、各郭のトレンチ設定箇所の下草刈りを行った。Ⅰ郭の上段と下段に東西と南北にそれぞれ一本づつ、計四本のトレンチを設定。

七月二〇日 Ⅰ郭上段南北トレンチから本格的な掘り下げを開始し、それと平行してⅠ郭北側の大手口と推定される虎口の清掃発掘を始めた。

七月二一日 虎口周辺の調査継続。新たにⅠ郭上段東西トレンチの調査を開始。

七月二二日 虎口周辺の調査継続。特に東側土塁を中心に実施。土

留めのために施したと思われる石積みを確認。Ⅰ郭上段東西南北トレンチの調査を継続。特に東西トレンチ西側からの遺物の出土が目立つが細片が中心。土師質土器類が多い。遺構は確認されていない。

七月二三日 Ⅰ郭上段東西トレンチ調査継続。相変わらず西側からの遺物が目立つ。新たにⅠ郭下段南北トレンチの調査開始。立ち木の根による攪乱が著しい。虎口周辺も調査を継続。東側土塁の精査中に灰釉陶器片出土。

七月二五日 Ⅰ郭上段東西南北トレンチ調査継続。東西トレンチ西側からの遺物出土は続くが、遺構は確認できない。Ⅰ郭下段南北トレンチ調査継続。同トレンチ南端付近は比較的遺物の出土が多く、性格不明の鉄製品一点を含む土師質土器出土。また井戸址周辺から古銭も出土。虎口周辺の調査も継続。性格不明な金属製品出土。

七月二六日 Ⅰ郭下段南北トレンチ調査継続。南端付近を中心に遺物の出土が続く。細片が多い。新たにⅡ郭南北トレンチ調査開始。同トレンチは北側では礫層が露出し遺構等の存在の可能性は低い。

虎口周辺調査も継続。

七月二七日 Ⅰ・Ⅱ郭両南北トレンチの調査継続。虎口周辺調査継続。西側部分の石積みを露出。

七月二九日 虎口西側の調査継続。石積みの露出作業が続ける。人頭大の礫が散在的に残存。Ⅰ郭下段南北トレンチ（井戸址周辺）調査継続。遺物が少なく、土師質土器片がわずかに出土。Ⅱ郭南北トレンチ調査継続。

七月三〇日 虎口周辺調査継続。新たにⅠ郭下段東西トレンチ調査開始。

八月一日 虎口周辺調査継続。Ⅰ郭下段東西南北トレンチ調査継続。

東西トレンチにて人頭大の礫が多数みられる。南北トレンチでは南端付近から相変わらず土師質土器片等の遺物が出土。それらに混じり古い様相を示す土器も出土。

八月三日 虎口周辺調査継続。I郭下段東西南北トレンチ調査継続。

南北トレンチの南端部で暗茶褐色土の落ち込みを確認。新たに南帯郭トレンチ調査開始。

八月四日 虎口周辺調査継続。南帯郭トレンチ調査継続。I郭上・

下段東西南北トレンチ調査継続。下段東西トレンチの礫は、石段状を呈していることが判明。また他のトレンチでジョレン精査を行ったところ、数基のピットを確認。

八月五日 虎口周辺調査継続。南帯郭トレンチ調査継続。I郭上・下段東西南北トレンチ内にて確認されたピットの調査。新たに西帯郭にトレンチ設定。

八月九日 虎口周辺調査継続。石積み露出作業はほぼ終了。I郭上・下段東西南北トレンチ内ピット調査継続。西帯郭トレンチ調査開始。

八月十一日 虎口周辺清掃作業。午後雨天のため調査中止。

八月十八日 虎口周辺清掃作業。西側帯郭トレンチ調査継続。I郭内井戸址周辺清掃。II郭内写真撮影。

八月十九日 虎口土塁の構築状況の確認のため、サブトレンチ設定し調査。

八月二十四日 虎口土塁サブトレンチ及び西帯郭トレンチ調査継続。

八月二十五日～九月九日 各トレンチ・虎口・井戸址の平面図（一部土層図も含む）の作成及びレベリング、写真撮影等を行い調査を終了。また、九月七日に調査成果の公表のために、一般市民を対象とした現地説明会を行った。

(2) 調査組織

調査主体 甲府市市史編さん委員会

調査担当者 磯貝正義（市史編さん委員会委員長）・田代 孝

（市史編さん専門委員）・萩原三雄（同上）

調査員 平野 修（帝京大学山梨文化財研究所）・宮澤公雄

（同上）

調査参加者 佐野嘉幸・小澤匂・興石恵美子・興石三郎・広瀬茂

子・白須千代・菅野彰紀・広瀬いち代・小林利男・小田切孝重・

菅野ナミ・堀内皇江・橋爪美年子・山田文子・河西ナミ・石田雅

一・佐藤正・志村憲一・市川孝一・広瀬千江美・田中優・滝沢み

ち子

調査協力 武蔵野興業株式会社・湯村温泉旅館組合

なお、事務局の高木伸也・数野雅彦両氏には、発掘調査を円滑に進めるにあたり多大なご尽力をいただいた。厚くお礼申し上げます。

五 土層の堆積状況

本城跡の基本層序であるが、山頂部であるために堆積土が薄いことや築城の際に削平・整地を行っているためかなり改変をうけた堆積状況と思われる。観察を行ったのはI郭下段南北トレンチ内で、以下のとおりである。

第1層 腐食土層（厚さ四～一二cm程度の堆積がみられる。）

第2層 暗黄褐色土層（整地面と思われる。粘性があり、しまりが強い。炭化物を少量含む。土師質土器片等の遺物を包含する。根による攪乱が著しい。厚さ八～二〇cm程度の堆積がみられる。）

第3層 黄褐色土層（地山である。粘性・しまり共に強く、自然礫を含む。）

六 各郭内の調査状況

本城跡は『山梨県の中世城館跡分布調査報告書』等で述べられているように、湯村山山頂を中心に土塁に囲まれた三つの郭及び二つの帯郭から構成されている。全体の規模は、東西約六五メートル、南北約一三〇メートルを測り、決して大きいとは言えない。本城跡の主郭（Ⅰ郭）は、南西部分の土塁に囲まれた最も大きな郭と思われる、内部の整形もよいで、井戸址もつ。この郭の中央部付近では段差を有し、南北に分けることができるが、郭内に、機能の分化があったのかも知れない。虎口は、南と北側部分及び東側のⅡ郭に接する所にも土塁を切断した出入口がある。この郭の南西隅は土塁が広がり櫓台状の施設の存在を示唆している。

Ⅱの郭は、主郭の東側に接してつくられ、より小さく、巨石が残存するなど雑然とした感を受ける。東側には特に土塁などの防御施設も見当たらず、古府中側に対しては開放した状況を見せる。これらの郭群の北側には、二本の堀切が設けられ、ここを複雑な出入口にした様子をうかがわせている。さらにその北側をⅢ郭とし、堀切によって尾根を画している。主郭の西側には、幅広な帯郭と土塁が設けられるのに対して、東側にはほとんど見当たらないが、Ⅱ郭の東側やや斜面を下ったところに石積み施設が設けられ、防御に工夫をこらした様子もうかがわれる。

本調査では、本城跡の中核をなすⅠ郭・Ⅱ郭を中心に調査を行い、西・南帯郭についても一部調査を行った。Ⅲ郭については巨石の残

存が著しく、トレンチ調査が不可能な状況であったため、今回は調査対象外とした。また、Ⅰ郭北側の虎口と中央部に位置する井戸址については清掃発掘を中心に調査を行った。以下、調査を実施した各郭内のトレンチの状況を中心に報告を行っていきたい。

(1) Ⅰ郭内上・下段東西南北トレンチ（第3図）

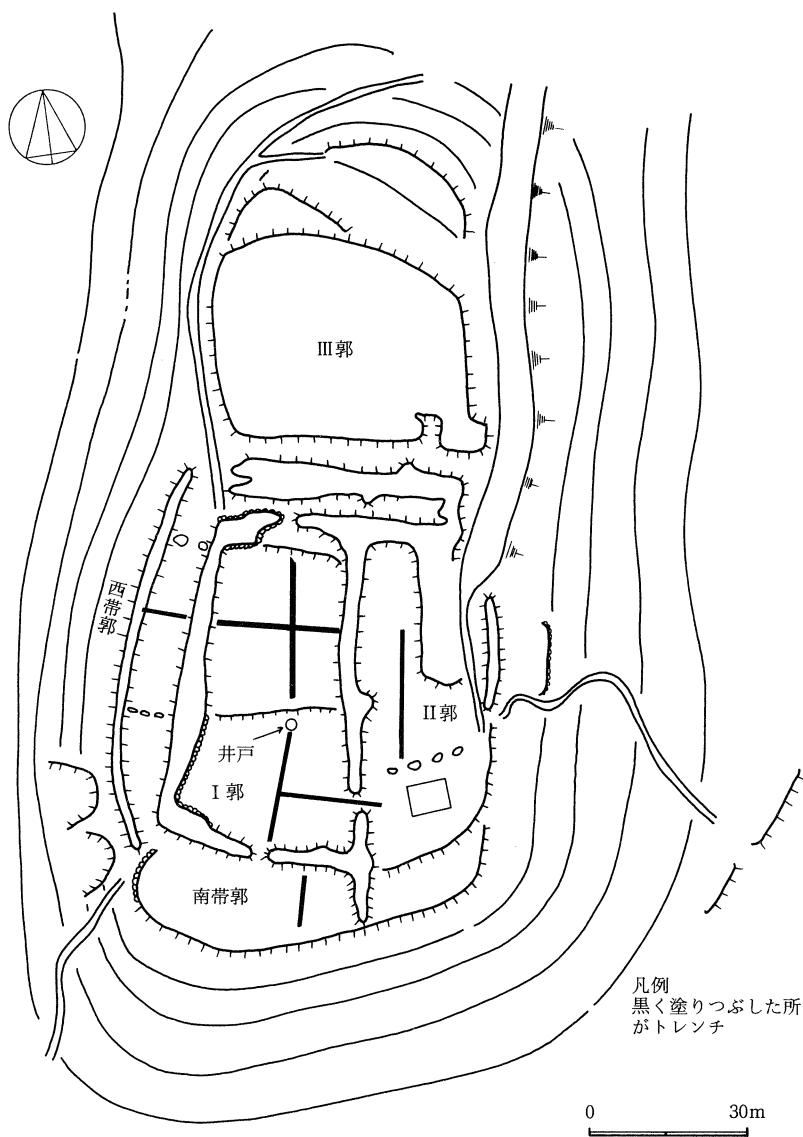
本郭には、中心部分に約一m四〇cmの比高差をもつ段差があり、その段差を境として上段と下段とに分けることができる。幅一・二m、長さ一七・五m、一八m、二二mを測る任意のトレンチを上段・下段それぞれに、東西南北に十字及びT字に接するように設定した。（第2図参照）。

上段・下段東西南北トレンチで確認された遺構としては、ピット六基と土塼状遺構一基がある。

上段部では東側土塁上端から西側土塁下端にかかるようにトレンチを設定し、これにはほぼ直交するように南北にもトレンチを設定した。東西南北トレンチでは三基のピットが確認されており、楕円形を呈し、径四〇～五〇cm、深さ一五～二五cmを測る。建物址の柱穴の可能性もあるが、部分的な確認であるため全容については不明である。他に東西トレンチの東側土塁上端部付近では、拳大程度の礫が散在しており、これらは土塁の裏込めのために用いられた礫だと思われる。

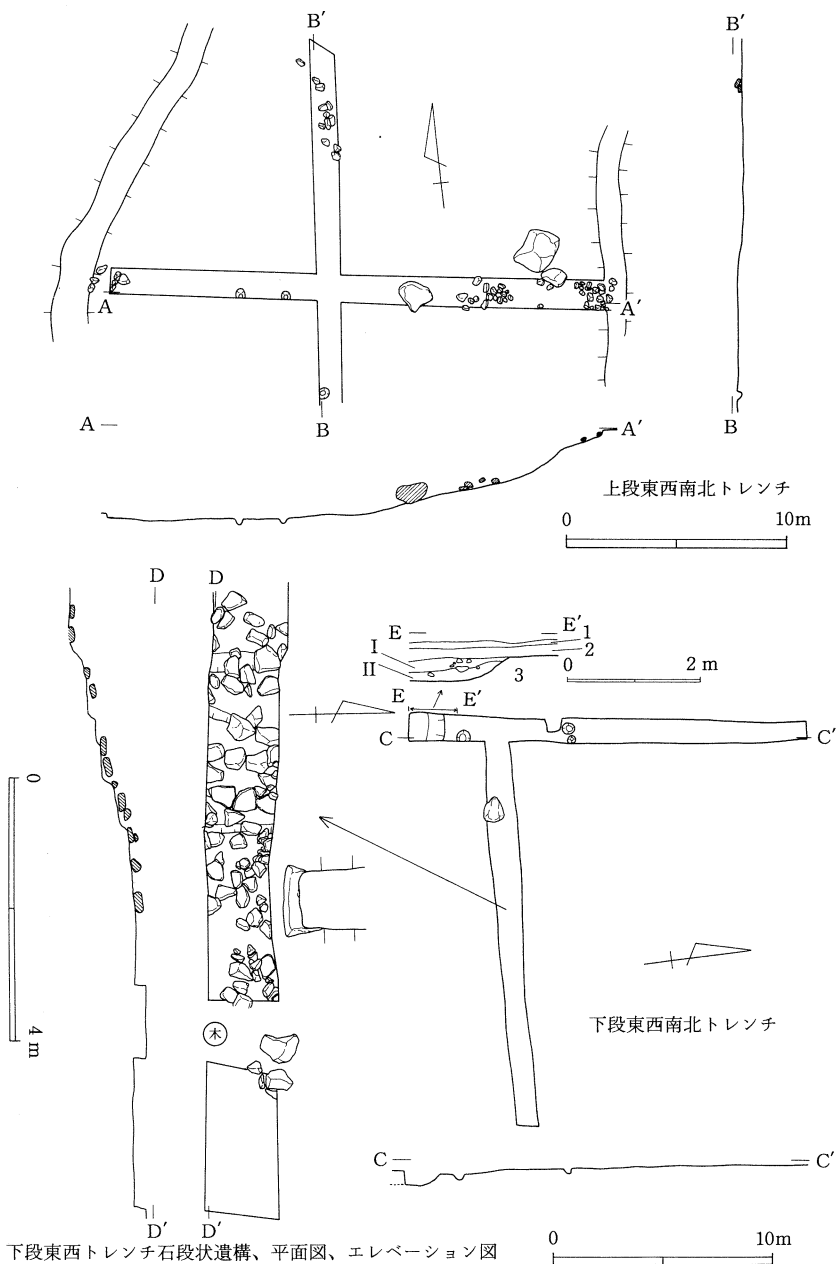
下段南北トレンチにおいても、上段部で確認されているピットとほぼ同規模のピットが確認されているが、規則的な配置はみられない。出土遺物は土師質土器細片が六号ピットから出土している。

また、同トレンチ南端では土塼状遺構が確認されているが、そのプランや規模等は調査範囲外にかかるため不明である。落ち込みの



(山梨県教育委員会『山梨県の中世城館跡』1986に加筆・修正)

第2図 湯村山城概要図及びトレンチ配置概念図



第3図 I 郭上・下段東西南北トレンチ平面図・エレベーション図

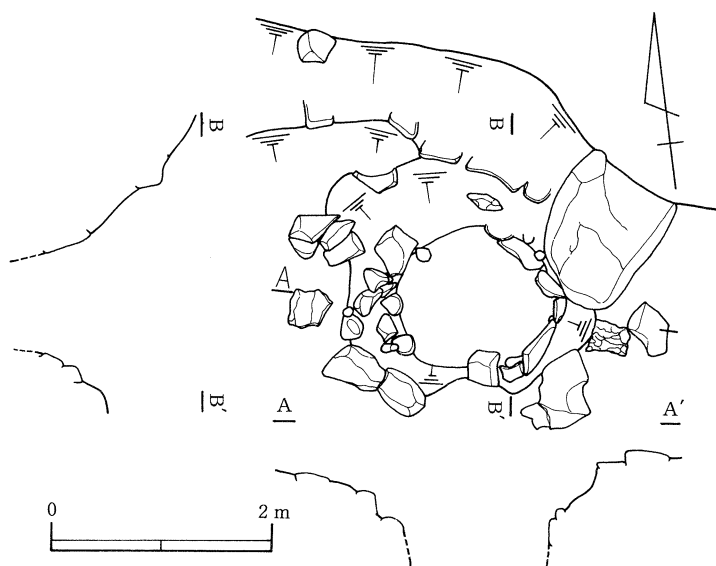
深さは確認面から約三七cmを測る。土層は基本的に二層に分層でき、第Ⅰ層が暗褐色土で粘性・しまり共に強く、炭化物及び拳大の礫を多く含んでいる。第Ⅱ層は暗黄褐色土で、粘性・しまり共に強く親指大の小礫を含んでいる。出土遺物は、上層では土師質土器皿が比較的多く出土しているが、中層から下層にかけては古墳時代前期に属する土器群が主体的に出土していることから、本遺構は当該期に属する可能性が高い。本遺構の覆土である第Ⅰ層の上層は、基本土層の第2層であり、層位的な様相からも、本城築造以前の所産である可能性が高い。

下段東西トレンチは、Ⅰ郭とⅡ郭を画する土塁が南北に巡っているが、通用口として土塁が途切れている箇所を設定したものである。本トレンチ内では、石段状遺構が確認されているが、遺存状況はあまり良好ではない。石段はトレンチ東端の約六m付近から始まり、約三mの幅にわたって構築されている。Ⅰ郭とⅡ郭との比高差は一m程あるが、その間に四～五段の石段がみられる。トレンチ内には石段に用いられた礫の他にも、多量の礫が散在するため、本石段状遺構周辺には石敷きを施していた可能性もある。

Ⅰ郭内トレンチ全体の遺物出土状況は、ビット及び土坑状遺構が存在する上段東西トレンチの西側と下段南北トレンチ南側からの出土が目立っている。

(2) Ⅰ郭内井戸址(第4図)

本井戸址はⅠ郭の下段部の北東側に位置しており、古い段階から知られていたものである。今回の調査では遺存状況の確認を行うために清掃発掘のみ実施した。その現況を示したのが第4図である。上部径二・一m～二・三mを測り、上部には石積みを実施

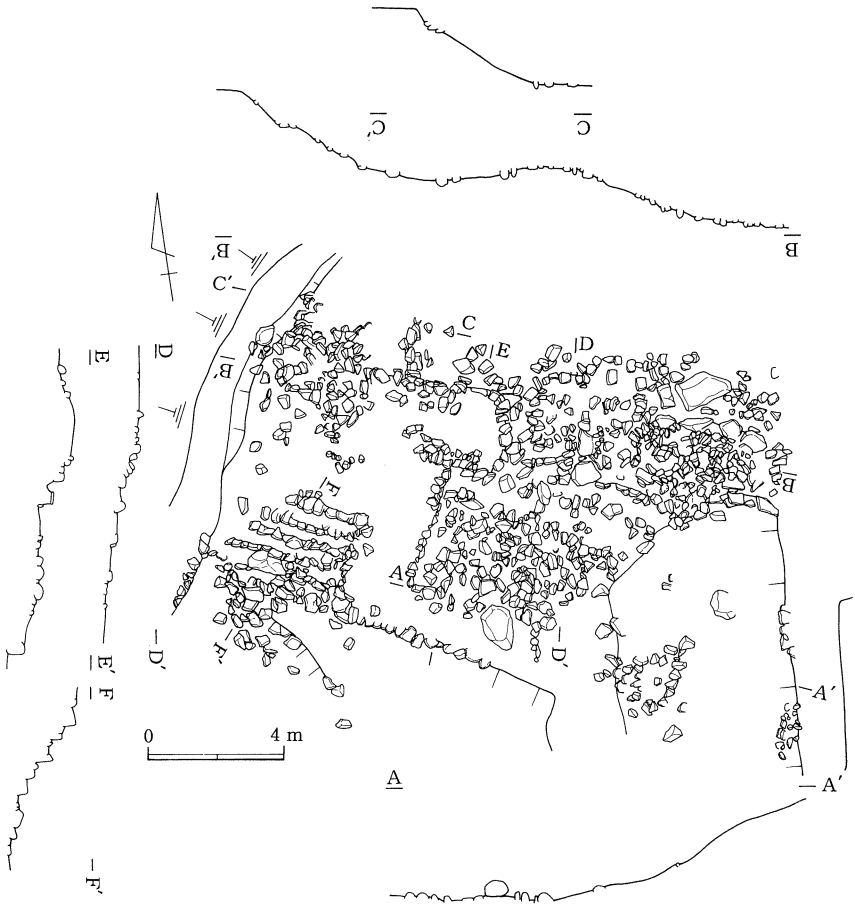


第4図 Ⅰ郭内井戸址遺存状況平面図・エレベーション図

している。下部構造については不明である。出土遺物はない。

(3) I 郭北側虎口(第5図)

本虎口はI郭の北側に位置し、大手口と推定されているものである。今回の調査では井戸址と同様に、遺存状態の把握のために清掃発掘のみを実施した。本虎口は武田氏が多用した枳形を形成し、その規模は、東西約一六m、南北約八mを測る。その構造は、土塁と石積みによって形成されており、西側は「コ」字状を呈し、東側は「L」字状をしている。石積みは長い年月を経て部分的な崩落が著しい。虎口東側部分は、石積みを施す土塁が東西に約六m延び、そこでI郭とII郭を画する南北に延びる土塁に連なっている。虎口西側部分は、前述のとおり「コ」字状に土塁が形成されており、石積みを施し



第5図 虎口検出状況平面図・エレベーション図

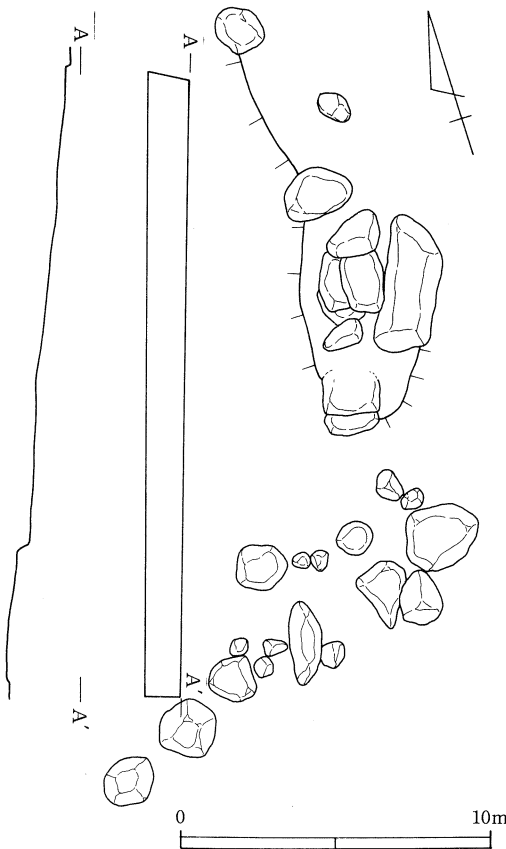
ている。その構築状況は、細部にわたっては不明であるが、土塁上部においてサブトレンチを設定し掘り下げたところ、拳大の礫が少量に含まれており、堅固に構築されていることがうかがわれる。また、土塁南側斜面には五～六段からなる石段状の石組みが施されていることが確認され、I郭との通路として使用されたものだろう。

虎口本来の通用口にも石段を施しており、この石段は虎口北側を走る二本の堀切のうち、南側の堀切内まで続いている。しかし同堀切内西側では、石段というよりも防御のための石列を配しているという状況で、非常に通りにくくなっている。虎口内部には多量の礫が散在し、その大半は土塁上から崩落したものと思われるが、一部通用口に向かって比較的大型の礫（平石）が敷かれた状態で存在することから、本来は虎口内部には石敷きも施されていたと思われる。

出土遺物は、虎口全域にわたって散在的に出土している。土師質土器の細片が中心であるが、その他、平安時代の土師器片や灰釉陶器片、須恵器片、性格不明な金属製品もわずかながら出土している。

(4) II郭内南北トレンチ(第6図)

本郭内の東縁と南縁には巨石が残存し、やや雑然としている。しかも現在の登山道が東縁から南縁にかけて入りこみ、休憩所が南側に建てられており、郭南縁にも存在したのであろう土塁は失われている。本郭内では、幅一・二m、長さ二〇mの任意のトレンチを南北に設定し調査を行った。表土下五～一〇cmで地山の黄褐色土層が露出し、地山面は北から南にかけて傾斜し、平坦ではない。トレンチ北側では地山の黄褐色土層に親指大から拳大の小礫を多量に含んで



第6図 II郭南北トレンチ平面図・エレベーション図

おり遺構の存在はなく、他の箇所においても遺構と思われるような落ち込み等は確認されていない。出土遺物も皆無に等しい。

(5) 西帯郭内トレンチ (写真図版参照)

I郭西側の一段低い箇所には幅九〇～一〇〇mを測る帯郭が存在する。比高差は約六mを測る。帯郭内は巨石の石列によって二箇所まで画されている。現況は深い藪と化していたため調査可能な箇所を選定し、伐採を行った後、幅一・二m、長さ九・六mの任意のトレンチを東西に設定し調査を行った。トレンチ東側にはI郭上段東西トレンチが位置する。調査の結果、帯郭西縁には一部石積みを実施した高さ約五〇cmの土塁が巡っており、その内側の平坦面には人頭大以上の大きさをもち平石が敷かれている。出土遺物はほとんどなく、土師質土器片がわずかに出土している。

(6) 南帯郭内トレンチ

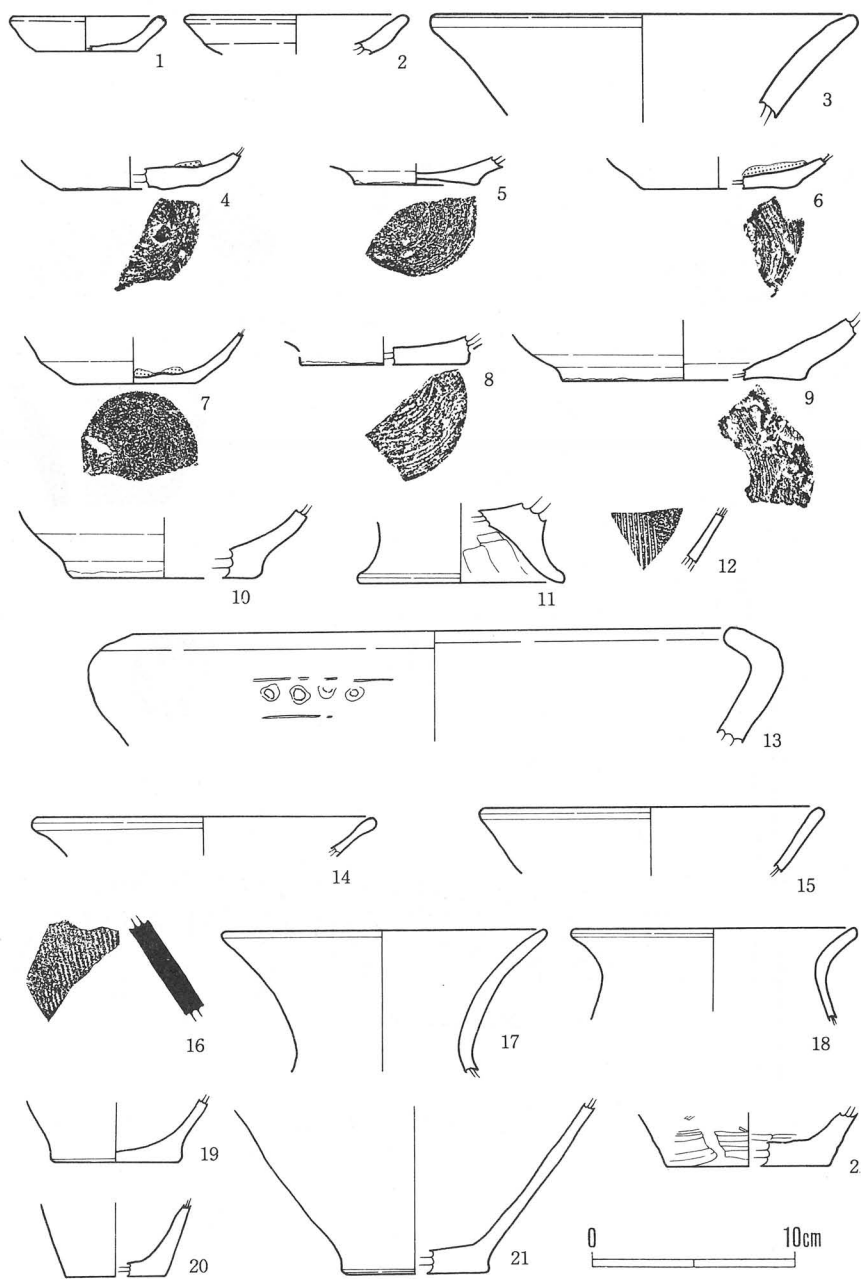
I・II郭の南側の一段低い箇所に幅一〇～二〇mを測る帯郭が存在する。比高差は約四～五mを測る。西側帯郭に比べ若干広く、帯郭内は明確な土塁によって画されている。しかし南縁には土塁は巡っていない。また、帯郭内は後世における石切り作業等で著しく攪乱をうけている。調査は、幅一・二m、長さ一二mの任意のトレンチを帯郭内のはば中央部に設定し行った。表土下約五～一〇cmで地山である黄褐色土層が露出する。遺構と思われるような落ち込みはなく、トレンチ内に人頭大の礫も散在するが、遺構には伴わないものと思われる。出土遺物は少量の土師質土器片、須恵器片が散在的に出土している。

七 出土遺物 (第7・8図)

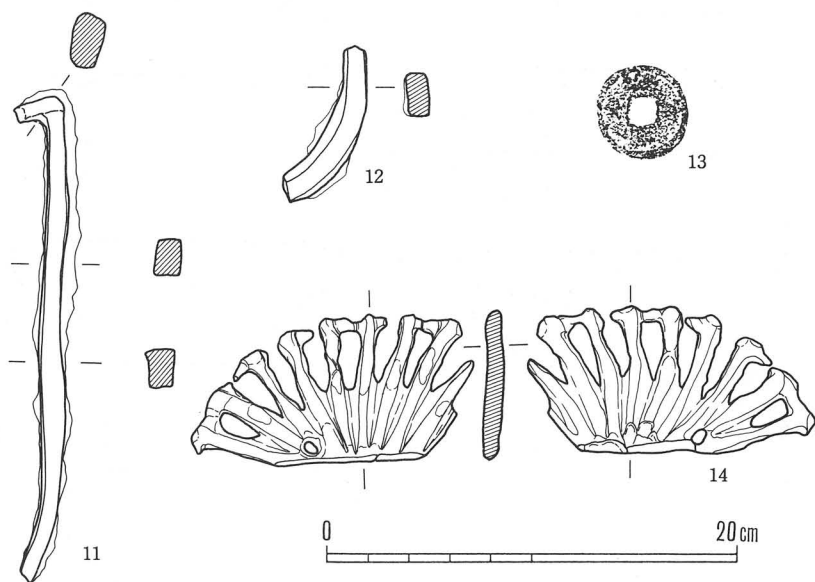
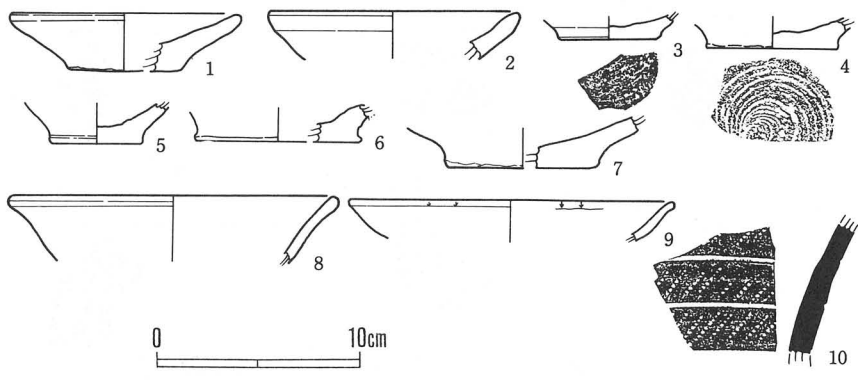
遺物は、量の多少はあるが、調査を行った各トレンチから出土している。しかし土器等で完形品は皆無であり、そのほとんどが復元にも耐えられない細片である。そのなかで実測し得た遺物はI郭内から出土した遺物のみで、それらを中心に以下説明を行っていく。

第7・8図に示した遺物が、I郭トレンチ内出土の遺物である。

遺構内出土遺物は少なく、遺構に伴わない、いわゆる遺構外出土物が中心である。第7図1～11は、土師質土器皿の口縁部及び底部・高台部破片である。12は陶器製播鉢片。13は土師質火鉢破片。14～15は土師器坏口縁部破片。16は須恵器甕胴部破片。17～21は土師器壺・甕口縁部破片及び底部破片で、下段南北トレンチ内土坑状遺構からの出土である。いずれも焼成は良好である。1は推定口径七・二cm、推定底径四・八cm、器高一・七五cm。白褐色を呈し、石英・長石・角閃石・雲母・スコリアを含む。2は推定口径七・四cm、暗褐色を呈し、石英・長石・角閃石・雲母・スコリアを含む。3は推定口径十四・二八cmを測り、赤褐色を呈し、石英・長石・角閃石・雲母を含む。4は推定底径五cm、底部の切り離しは回転糸切り。明橙色を呈し、長石・スコリア・金色雲母・角閃石を含む。5は底径六・二cm、底部の切り離しは回転糸切り。黒褐色を呈し、金色雲母を多く含み、他に長石・石英・スコリアを含む。6は推定底径五・二cm、底部の切り離しは回転糸切り。黄褐色を呈し、長石・スコリア・角閃石を含む。内面にススの付着あり。7は底径五・八cm、底部の切り離しは回転糸切り。褐色を呈し、石英・長石・角閃石・金



第7图 I 郭内出土遺物 (1/4)



第 8 図 虎口及び I 郭内出土遺物 (1~10は $\frac{1}{4}$ 、11~14は $\frac{1}{2}$)

色雲母を含む。内面にススの付着あり。8は推定底径五・八cm、底部の切り離しは回転糸切り。明褐色を呈し、長石・石英・スコリアを含む。9は推定底径八・六cm、底部の切り離しは回転糸切り。黄褐色を呈し、長石・石英・雲母・角閃石・小石を含む。10は推定底径六cm、底部切り離しは磨滅が著しく不明。鈍い黄褐色を呈し、長石を多く含み、他に石英・雲母・スコリアを含む。11は推定高台径七cm、褐色を呈し、金色雲母・長石・スコリアを含む。12は陶器製播鉢片。13は推定口径三一・八cm、口縁部が内彎し、体部に二本の沈線による区画を巡らし、その区画内に円形の印刻文を有する。淡褐色を呈し、金色雲母を多く含む。他に石英・長石・角閃石・スコリアを含む。焼成はやや軟質。14は推定口径一一・六cm、口唇部は玉縁を呈する。明赤褐色を呈し、石英・スコリア・長石を含む。15は推定口径一一・八cm、黄褐色を呈し、スコリア・長石を含む。16は須恵器瓶か甕の胴部破片。タタキ目痕をもつ。17は推定口径一五・八cm、黄褐色を呈し、一〇三mm大の長石・石英・角閃石・スコリアを含む。18は口径一三・八cm、黄褐色を呈し、石英・長石・金色雲母・角閃石・スコリアを含む。19は推定底径六cm、黄褐色を呈し、一〇三mm大の長石・石英・角閃石・スコリアを含む。20は推定底径五cm、黄褐色を呈し、石英・長石・金色雲母・スコリア・角閃石を含む。21は推定底径七・四cm、明褐色を呈し、石英・長石・スコリア・角閃石を含む。22は推定底径八cm、黄褐色を呈し、石英・長石・スコリア・角閃石を含む。

第8図は虎口周辺部（11・10・14）及びI郭下段東西南北トレンチ（11・13）からの出土遺物である。11・7は土師質土器皿の口縁部・底部破片である。5は土師器坏破片。9は灰釉陶器皿口縁部破

片。10は須恵器甕頸部破片。11・14は金属製品である。11と12は鉄製品で前者は角釘、後者は不明である。13は古銭であるが、両面ともに磨滅が著しく字体の判読は不可能である。14は銅製品でありその用途・最終的な形状については不明であり、武具あるいは装飾具であろうか。1は推定口径七・八cm、推定底径三・八cm、底部は磨滅が著しい。淡褐色を呈し、石英・長石・雲母・角閃石・スコリアを含む。2は推定口径八・八cm、黄褐色を呈し、金色雲母を多く含み、石英・長石・角閃石・スコリアも含む。3は推定底径四・八cm、底部の切り離しは回転糸切り。橙色を呈し、スコリアを多く含み、石英・長石・角閃石・スコリアも含む。4は推定底径六・四cm、底部の切り離しは回転糸切り。褐色を呈し、石英・長石・角閃石・スコリアも含む。5は推定底径四・二cm、底部は磨滅が著しい。暗黄褐色を呈し、スコリア・角閃石・雲母を多く含む。6は推定底径七・八cm、底部の切り離しは不明。淡褐色を呈し、石英・長石・角閃石・スコリアを多く含む。7は推定底径五cm、底部は磨滅が著しい。黄褐色を呈し、長石・角閃石・スコリア・石英・金色雲母を多く含む。8は推定口径一一・八cm、褐色を呈し、長石・スコリアを多く含む。9は推定口径一六cm、灰褐色を呈し、胎土は緻密である。口唇部の内外に釉がかかる。10は須恵器大型甕頸部破片で横位に巡る沈線とその間に櫛刺突文を施す。11は現長一二・二cm、〇・五cm×〇・九cmの長方形の断面をもつ。12は現長四・二cm、〇・五cm×〇・九cmの長方形の断面をもつ。14は縦幅三・六cm、現存横幅六・九cm、厚さ四mmを測る。透かしと孔が穿たれている。

以上、I郭及び虎口周辺からの出土遺物について説明してきたが、これら湯村山城跡全体の遺物の様相をみると、遺物の主体をなすの

は、土師質土器皿、土師質の火鉢、搦鉢等で日常什器が占めている。陶磁器類の出土は皆無で、当該期の山城跡の性格を端的に物語っているといえよう。また、戦国期以前の遺物もわずかながらみられ、特に古墳時代・平安時代の土師器・灰釉陶器等は、本城築造以前の湯村山の様相を示す数少ない資料といえよう。

八 考 察

湯村山城に対する今回の調査は、市史編さん事業に伴う試掘調査という限られた調査であったために、全容の解明には至っていないが、いくつかの新しい成果と今後の課題が得られたので、若干の考察を加えてまとめたいと思う。

最も大きな成果のひとつは、主郭であるⅠ郭の北側に設けられた大手口と見られる枡形虎口の存在であろう。東西約一六m、南北約八mの規模で、「コ」の字状と「L」字状の形態の土塁を組み合わせてつくっている。躑躅ヶ崎館や葦崎新府城大手口に設けられているコ字形に土塁を合わせ直進させる枡形虎口とは、形態をやや異にしているが、意外に堅固で複雑な様相を呈している。虎口を形成する土塁はすでに報告しているとおり、「挙大の礫が多量に含まれており」、ていねいなつくりをしている。虎口上に登る五、六段の石段状施設も見られ、虎口上面に櫓台的な施設が設けられていた可能性が高い。

この虎口の形成がいったいどのようなのか、この点の本城の性格と役割を追究するだけでなく、武田氏の築城技術を探るうえでもきわめて重要な課題となっている。湯村山城の場合も、大永三年の築城当初の構造がどのようなであったのか、現在ほとんど研究が進んでいないが、武田氏時代の改修と、武田氏滅亡後の徳川氏による改修

の可能性が指摘されており、今後さらに検討を要する課題である。八巻孝夫氏も築城当初よりも、大永年間以後と徳川氏の改修を特に強調しているが、縄張の特徴から判断したのであろう。

今回の試掘調査では、虎口部分において武田信虎による築城当初の形態を探ることはできなかったが、本城に先立つ永正一七年築城の躑躅ヶ崎館の主郭部分の虎口も、単純な平入りの虎口であって枡形をつくっておらず、また織豊系城郭における虎口の変遷と比較検討すると、天文一〇年以降の所産とみるべきで、虎口部分はやはりのちの改修の手が加わっていると見た方がよい。しかし、このような枡形虎口を採用している例を見ると、武田氏の場合では、いずれも領域支配上、あるいは軍事上重要な拠点の城郭に多く、湯村山城の性格・役割の重要性を端的に示す存在となっている。

本城の各郭内の機能に関しても、すでに指摘されている点であるが、井戸を有し、整然とした方形プランを呈したⅠ郭が他より卓越した状況を示す。また、先述したように、狭い調査区域ではあったが、Ⅱ郭に設定されたトレンチ内からは出土遺物も少なく、雑然とした内部の状況も加味すると居住性に乏しく、本城はあくまでⅠ郭を中心とした求心的な郭配置をとっていたことが理解できる。Ⅰ郭はこのように、他の郭に比較してはるかに重要視された郭であったが、方形に整然と土塁をめぐるして、Ⅱ郭やⅢ郭と明確に区分した郭配置が、大永年間の当初から確定していたと見るべきだろうか。

先に述べたⅠ郭北側に設置された大手口の枡形虎口もこの塁線に付設されていることを見ると、信虎による当初の構造はもう少しシンプルであり、のちの改修の結果、現在の形態ができあがったと考えた方が妥当性がある。

Ⅰ郭内部から、柱穴の一部らしいピットが検出されている。全体

の広がりには確認できていないが、掘立柱建物址の可能性もある。躰
躰ヶ崎館跡や勝沼氏館跡のように戦国大名ないしそれに匹敵する階
層の館の場合、礎石建物址の例が多いが、それとは対照的に、近年
発掘調査された南部町葛谷城やかつて調査された小淵沢町笹尾塁跡、
白州・武川両町の中山砦、市川大門町の古城山砦などはいずれも掘
立柱建物址らしき柱穴群の検出を見ている。躰躰ヶ崎館の西北隣り
で調査され、全体像がおおむね浮きざりとなった土屋敷跡も基本的
に掘立柱建物址群で、建物構造からも階層的格差を見いだすことが
できる。湯村山城の政治的・軍事的重要性は認められようが、建物
構造はその性格からして掘立柱建物と見るべきであろう。

出土遺物は細片ながら、「かわらけ」類の素焼きの土師質土器が
検出されている。先にあげた笹尾・中山・古城山砦などよりはるかに
多いことが指摘できる。このことから、本城は、緊急的、臨時的
城郭というよりも、古府中防衛の拠点の城郭として衛士が日常的に
在城していたことを示すのであろう。しかし、日常的什器である皿、
播鉢、火鉢などの検出例に対し、中国陶磁などが皆無の状況であつ
た点は示唆的である。後者は近年、拠点の城郭だけでなく、中世城
郭に普遍的にみられるようにもなったが、この点からも在城した人
びとの階層性が示されていると言えようか。なお、すでに多くの指
摘があるように、南側及び西側に設けられた帯郭や、I郭の南西隅
の土塁におかれたと推定される櫓台の存在、さらに大手口の櫓台状
施設などに見られるように、西及び南側を重視した構えをもつ。こ
の城の役割の一端を物語っている。また湯村山城は、一四世紀中
頃以降、甲斐国で強大な勢力を誇り、塩部・志摩荘に本拠をおいた
という逸見氏の要害という指摘が上野晴朗氏より提起されているが、
今回の調査も含め、これを明快に肯定する史料は見あたらない。現

段階では、武田信虎が大永三年に築城したのを契機に、その後の改
修を経てしだいに整備され、今日の形態ができあがっていったと考
えるべきであろう。

おわりに

湯村山城の調査は、甲府市市史編さん委員会考古・古代・中世専
門部会（磯貝正義部会長）において、田代孝・萩原三雄両専門委員
のほか、調査員として平野修・宮沢公雄・広瀬千江美（帝京大学山
梨文化財研究所研究員）が加わって実施した。その間には、地元の
皆様方を始め、多くの関係機関・関係者のご指導・ご協力をいただ
いた。厚くお礼申し上げたい。なお、本報告の執筆は、一〇三・八
を萩原、四〇七を平野が分担した。

引用・参考文献

- ① 上野晴朗『甲斐武田氏』一九七二年
- ② 飯島善時『湯村山城址と周辺の遺跡』『歴史と民俗』第三号
一九七九年
- ③ 磯貝正義編『日本城郭大系』第八巻 長野・山梨 一九八〇年
- ④ 山梨県教育委員会『山梨県の中世城館跡』一九八六年
- ⑤ 千田嘉博「織豊系城郭の構造―虎口プランによる縄張編年の試
み―」『史林』七〇巻二号 一九八七年
- ⑥ 村田修三編『図説中世城郭事典』第二巻 一九八七年
- ⑦ 甲府市市史編さん委員会『甲府市史』史料編第一巻 原始・古
代・中世 一九八九年
- ⑧ 千田嘉博「要害山城の構造」『甲府市史研究』第八号 一九九
〇年



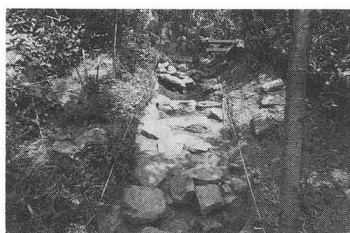
I 郭下段部分近景 (北から)



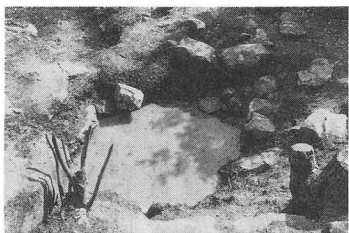
I 郭下段南北トレンチ土塚状遺構 (東から)



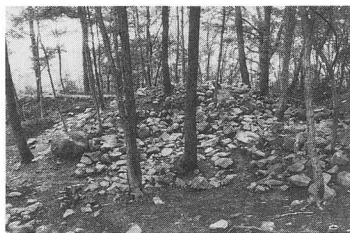
I 郭下段南北トレンチ内ビット (北から)



I 郭下段東西トレンチ石段状遺構 (西から)



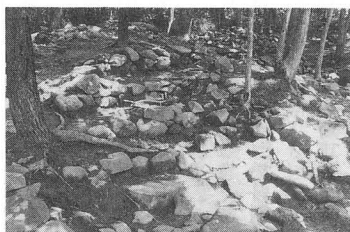
I 郭内井戸址 (北から)



虎口西側土塁 (東から)



西側帯郭礫出土状況 (東から)



虎口西側土塁石段状遺構 (南西から)